

◎野木京子

今月もよい詩が多く、楽しく読ませていただきました。佳作のなかで特に印象に残った詩を紹介します。

生まれながらにして

泣く才能のあった僕たち

佐々木佑輔（埼玉県）

\*この世に泣きながら生まれ出た。にっこり笑いながら産まれたわけじゃない。だから辛さを受け入れて進んでいけばいい。「泣く才能」という言葉が効いている。

今死んだら私の魂は

猫たちが伸びる実家のベッドに

すっ飛んでいくのだろう

佐々木みつる（東京都）

\*猫は感覚が鋭いから、魂が飛んで来たことにすぐに気づいて寄り添ってくれるはず。死んでもきっと寂しくないだろうと穏やかな気持ちになる。

ポストに入っていたのは

不在票と、指サック

ありがとう。今年もよろしく。

おんぷ（東京都）

\*配達員さんは指サックをポストに落として、失敗した！と思っただろう。受け取った側は、勤勉さを贈り物されたようで、心が温かになった。巣ごもり生活で、配達員さんはこれからも忙しい。

冬銀河ひとりひとりにある秘密

燦嗣いとり（愛知県）

\*たった一行の大きな世界。秘密は後ろめたくて重たい。自分のことだけでなく「ひとりひとりにある」としたところに、他者への優しさと共感が感じられる。

耳たぶにかつと流星落ちてきた

バドミントンに出会った朝に

さいう（愛知県）

\*入部する部活決めるときだろうか。求めていたものに出会えた喜びを鮮やかに描いた。さいうさんは「マグカップに／注いだ瞬間から／牛乳は美味しいって分かる」という詩もあり、真っ白な色彩が見えるようで、よかった。

今の地球が私達のものなら

私達のこの地球もいつかは

誰かのものになるだろう

宇井 麻千（大阪府）

\*自分が生きている時代のことしかわたしたちは考えないけれど、未来の見知らぬ人のためにも地球は存在する。壮大な時間の流れを感じた。

庭に

零れ種の南天が実ったのは

雪が積もったら兎を作る人

に選ばれたってこと

春町 美月（大阪府）

\*雪ウサギを作ってから赤い実を探すのが普通の人。鳥が種を運んできてくれたから作することを許されたという、普通と逆の、謙虚な姿勢で詩が成立している。

胎内で聴いた

母の心音を

みんな忘れて大人になった

縫目（岐阜県）

\*この詩に立ち止まったとき、懐かしい気持ちになった。母の心音を思い出せるならわたしも思い出したい。生存の源に立ち戻ることでもあるから。

前世も来世も来々世も

生まれる星の地軸が

傾いていて欲しい

旭日 百（滋賀県）

\*地軸が傾いているから、この世に季節があり、美しい風景の中で生きることができる。地軸が傾いていることの重要さに気付かせてくれた。

家計簿に「恋愛」の欄設ける朝

合川秋穂（京都府）

\*家計簿の費目は「外食費」「交際費」「通信費」などいろいろあるけれど、「恋愛費」という費目の美しさと楽しさ。この家計簿のつけかたなら、出費が少々増えても、やっぱり楽しい。

アパートの花壇のへりに

ちゃんと座る

ちいさいおじさん居た通学路

儀間ゆみ（沖縄県）

\*ほんの少し前までみんな小学生だった。わたしも小学生のころ不思議なおじさんに会ったことがあるのを、この詩が思い出させてくれた。

昼下がり

急須で入れた茶の中に

宇宙はあるかと想像してみる

いけす（東京都）

\*急須のなかでゆっくり回転している茶葉。宇宙の果てには何があるのだろうか。巨大な急須みたいな器の中で、わたしたちの星雲も廻っているのかもしれない。

小さな天気予報士は

靴を蹴り上げ

晴れだと笑った

田中奏多（山梨県）

\*幼い子の笑顔が見えるようで晴れ晴れする。映像的でもあり、くすりと笑わせるユーモアもある。

未来の私を助けるため

少しだけ頑張る

の

繰り返し

きやま いと（兵庫県）

\*頑張るのは、将来の自分への贈り物。こういう発想があるのかと新鮮だった。励まされた。